

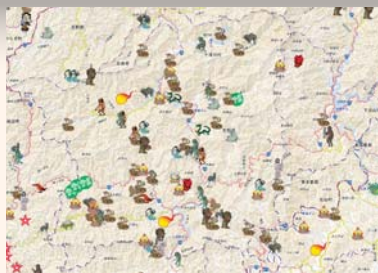
熊野の
本林から

怪熊野

「十津川の怪異(其の二)大蛇①」



和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授



十津川付近の妖怪、怪異マップ。妖怪伝承も多いが、大蛇に関する伝承が目立つ(地理院Webマップを改変)

十津川は紀伊半島の中央に位置するが、熊野地域かというところではない。吉野地域になる。しかし、隣接する本宮などのつながりは深く、熊野とは切っても切れない関係にある。そこで、今回は十津川の怪異を取り上げることとする。

十津川の妖怪マップをみると、やたらと大蛇の伝承が多いことが分かる。筆者が調べただけでも八木尾谷、竹谷、大井谷、梅垣内、

小松迪(こまつだわ)、腹巻ケ滝、北又谷、松柱、栃尾、小 hands、広尾谷、親の谷、川津、内原、三里越、高津、杉清、古矢倉、玉垣内、熊谷口、谷瀬、今旭、三本杉、今



日本の蛇の中で最大となるアオダイショウ。最大全長2mが限度のヘビであるが、十津川に伝わる話の中の大蛇はもっと大きい。

西釜中、上野地で伝わっている。話は十津川の全村に分布しており、場所を特定できない話も多い。大半は淵や滝つぼのヌシの伝承だが、中には、大蛇に出遭った、死骸を見た、大蛇が這い回った痕跡を見つけた、などの話もある。

大蛇のサイズは、長さ2mほどであった、胴回りが一升瓶ほどであったなどさまざまだが、倒れた松の木と見間違えうほどにまで太った大蛇の話も伝わる。中には昭和27年という新しい目撃例もあった。巨大なアオダイショウだったという話もある。外国の大蛇なら普通にあり得そうなサイズだが、日本の蛇としては怪物クラスだ。昔は日本にも大蛇が生息していたのであろうか。北又谷の大蛇は特に大きく、胴回

りが五斗(90リットル)たるくらいもあり、火焰(かえん)を噴いたという。こままでいくと、もうこの世のものではない。梅垣内の大蛇は、鎌を投げつけられて逃げる際、山を崩しながら逃げたという。この崩落跡は蛇崩(じやくく)と呼ばれるようになった。

大蛇というと、土砂災害との対応で語られることが多い。崖崩れ、土石流の爪跡を大蛇が這い回った跡に例えた話は全国的に多い。十津川は土砂災害が頻発する場所である。明治22年の十津川水害、平成23年の紀伊半島大水害の際の土砂災害の多さは尋常ではなかった。関係ないかもしれないが、大水の後に大蛇を目撃した、という話も伝わっている。ところが、隣接する本宮や龍神では十津川ほどは大蛇の話は伝わっていない。隣村だといふほどの近くにあつても、環境は同じではないということが分かる話だ。

中島敦司(なかしまあつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

